

令和7年12月1日

立教188年

12月号
第639号



発行所

天理教字仁大教会
〒677-0015 西脇市西脇770-4
電話 0795(22)4066番
FAX 0795(22)4072番
unigrandchurch@yahoo.co.jp

12月21日(土) 字仁大教会毎月団参

1月5日(月)～7日(水) お節会



大教会一斉団参(11月)

散歩道

先日、親戚の葬儀に参列した。出直されたのは九十歳代の母君。長年在宅で介護をされてきたが、一カ月ほど前に容体が急変し病院へ行くと、医師からあと数日の命だろうと告げられた。

ご長男は「今月は行事も多いから、あと一か月もってくれないかなあ」と思ったが「いやいや、親の寿命を自分の都合で決めようとしている」と思い直し、短かろうが長かろうが残りの時間を精一杯親孝行させてもらおうと心に決め、再び家に連れ帰り家族でお世話が改めて寄り添える期間を経て、静かに出直されたとのこと。

人はつい、自分の都合や予定に合わせて物事が進んでほしいと願ってしまう。しかし、こちらの思惑を離れ、与えられた日々を報恩感謝の心で素直に通るところに、理は治まるべき方向へ運ばれていくのだと感じさせられた。どんな中でも、成ってくる理を楽しみながら、日々のつとめに励みたい。

一理塚

おぢばから石上神宮を経て山の辺の道を南へ四キロ程行くと長岳寺という古刹がある。天長元年（八二四年）淳和天皇の勅命により弘法大使が開いたと云われる大和神社の神宮寺で、約千二百年の歴史がある。

先日息子と一緒にふらっと立ち寄ると、秋の仏画展が催されており、大地獄絵が開帳されていた。狩野山楽という絵師の筆による江戸時代初期の屏風絵で、縦四メートル横十一メートルに及ぶ大迫力の極楽地獄図であった。そこにはよく耳にする三途の川や賽の河原に、六道輪廻や八大地獄、それにかの有名な閻魔大王を含む十王裁判図などが画面一杯に描かれ、物語を見ているかのように圧巻であった。

きて初めて成仏することが出来るようである。なかなか大変な道のりだ。

また地獄で切られ舌を抜かれ戦わされ焼かれ、哀れに苦しむ裸の人間の姿をこれでもかと見せられると、そんな恐ろしい処へは絶対行きたくないと誰もが思うだろう。文字の読めない人も多かった当時に、お経の意味は分からずとも、勧善懲悪の説法の効果を増幅するのに、この絵図の果たした役割は大きかったのだろうと拝察する。ましてや小さな子供の目には、一度見たら忘れられない印象を焼き付けたのではないか。長岳寺はおやさまのご生家のある三昧田からも近い。十三歳で中山家への縁談話があった時に、極楽浄土を願って尼になりたいと言われたのは、もしかしたらこの大地獄絵図をみせられていたからかもしれないぞと、想像を膨らませてしまった。気になる方は天理市のホームページに、この絵を背に説法されるご住職の動画があるのでご覧頂いたら結構かと。

江戸時代の人々は、お上の統制下で神社の影響を受け、男尊女卑で封建的な家父長制を当然の事として暮らしていた。そんな時代に大和の片田舎の主婦であったおやさまの説かれた教えは、全ての慣習や迷信や思い込みから解放される画期的なものであった。

おさしづに、「ほん何でもない百姓家の者、何にも知らん女一人。何でもない者や。それだ

めの教を説くという処の理を聞き分け。」とあるように、月日の社にお定まり下さる前の中山みき様の事は、何にも知らん女とまで言われている。またそれだけに、既存の体制や思想を守りたい人々にとって、あらゆる権威に捉われないおやさまは脅威に映り、後に厳しい弾圧を受けられるに至った。

間もなくおやさまが子供の成人を急ぎ込まれ現身を隠されてから百四十年になる。未だに人々はどれだけの迷信や思い込みの中に暮らしているのだろう。さらに真偽の判らないネット情報で新しい常識を刷り込まれてい

る現代で、どれほどの人がこの世界の本質に気付いているのだろう。おやさまの説かれた心の自由とこの世での陽気ぐらしという解放感あふれる教えは、世の中にあって希望になり得ると共に、既存の勢力にとっては脅威にもなる。その中でおやさまのように、折れず退かずあきらめず、この信仰を持ち続ける事が出来るのかを試されているようにも感じる。

極楽と地獄という、子供へのアメとムチのような信心へのいざない方ではなく、今ここに人間として在ることに感謝して、親神様のお働きを受けて陽気にたすけあって生きるという、自発的な信仰につけた私たちはそれだけで幸せ者である。その喜びを胸に、おやさまが先導し、たくさん先の人が繋いで下さった自由へのバトンを受け継ぎ、次の人へ渡していこう。教祖百四十年祭という一つの塚は目の前だが、まだまだゴールは遙か先にあるのだから。

大教会秋季大祭神殿講話（要旨）

世話人 松村登美和先生

秋季大祭は、私たちにとって立教の元一日を記念する大切な祭典であります。親神様は、人間創造の元初まりに「世界一れつをたすけたい」との真実の思召をお示しくださり、私たちの前にお現れくださいました。親神様は、人間が陽気ぐらしをする姿をご覧になって共に楽しみたいと願われ、この世界をお創りくださいました。しかし実際のところ、陽気に暮らせる時ばかりではなく、心がいつも曇ることもあります。そうした人間の姿をご覧になった神様が、「真からたすけたい」とのお心でこの道をお開きくださったのであります。

先日、インターネットで生活意識に関するアンケートを見ました。「あなたは幸せですか」という問いに対し、「幸せ」と答えた人が95%と意外に多く、不幸せと答えた人が5%、「ど

ちらともいえない」が2%でした。また「今一番欲しいものは何ですか」という質問では、予想どおり一番はお金で61%、次に健康が11%、三番目に安定した暮らしと続いていました。お金もあり健康もあっても、なお「安定」が足りないと感じる人がいる。安定とは外側の条件ではなく、本人の心の感じ方によるものだと気づかされます。ここに信仰の大切さ、そして私たちの使命の一端があるのではないかと深く感じました。

私どもの教会では二十日が大祭でしたが、前日の十九日に五十代のご婦人がお参りに来られました。二十代で糖尿病を患い、心が不安定になったことをきっかけに教会へ足を運ぶようになった方です。発症から三十年以上、低血糖発作がたびたび起こり、意識を失ったり、重い時には痙攣が起きたりする。寝ている間

に発作が起これば、最悪の場合命に関わることもあります。それでも徐々に自身の状態を把握できるようになり、今も信仰を続けてくださっています。

その方は仕事で大祭当日に来られないため、前日に参拝されたのですが、「私はこの神様のおかげで今があるんです」と仰るのです。特にこの三年千日の間に、寝ている間に最も危険とされる発作が三度起きました。

一度目は、仕事帰りの電車で疲れて眠ってしまい、降りる駅で目が覚め立ち上がった瞬間に倒れたところを、周囲の方々や駅員さんのおかげで助けられました。二度目は家で寝ている時、隣にいた旦那さんが異変に気づき、救急車を呼んで事なきを得た。三度目は旦那さんが不在の日で、娘さんが朝になっても部屋から出てこない母を心配して見に行くと、布団の中で真っ白になっていたところを発見し、救われました。

その三度目が今年八月のことでした。ご本人からその夜に電話があり、数日後に教会へ来ら

れた時も、むしろあっけらかんとして、「私は親神様に守られているから大丈夫です。神様にもたれて通ります」と力強く言われました。

医師から見れば決して健康とはいえず、ご家族も心配しています。しかし、ご本人の心は安定しており、毎月の月次祭にも欠かさず参拝され、さらにはにをいがけにも同行してくださいます。「おたすけしたらたすかる」と教祖が仰せくださるからと、若い頃からその言葉を信じて一緒に回ってくださるのです。彼女の「私は親神様に守られている」という一言には、信仰の核心が込められているように思えます。

親神様の御守護を分かりやすく示してくださった十全の守護。その中でも、例えばくもよみのみこと様のお働きは「人間身の内の飲み食い出入り、世界では水気上げ下げの守護の理」であります。この教理を私が初めて深く理解したのは、布教の家崎玉寮にいた二十代の頃でした。当時、教務支庁の近くには大き

な農家が多く、私が布教に伺ったある家で、くもよみのみこと様のお働きを書いたチラシを持参し懸命に説明しました。するとその家の奥さんが「よくわかります」と言われたのです。信仰されているのかと尋ねると「初めて聞きました」との返事。理由を伺うと、最近の出来事を話してくださいました。

息子さんにお嫁さんが来られたものの、体が細く、農家の仕事には体力がいるからと「もっと食べなさい」と勧め続けたそうです。なかなか食べられなかったお嫁さんも次第に太ってきて、これで安心と思った矢先に突然倒れ、病院へ運ばれました。原因がわからず検査を続ける中、ある日「ご家族とお母さんも来てください」と呼ばれ、難しい病気かと覚悟して行かれたそうです。ところが診断は「病気ではない」。もともと体が細く、血管も細い。そのため、体が大きくなると栄養を全身に送ろうとしても血管が追いつかず、心臓が悲鳴をあげて倒れたのだそうです。「無理に食べさせては

いけません」と医者から言われた奥さんは「先日そんな話を聞いたばかりだったので、神様が人それぞれに最も良い形でご守護くださるという教えがよくわかります」と言われたのでした。



その言葉を聞いた時、私は初めて十全の守護の實際を深く理解したように思いました。布教に伺ったつもりが、結局は私自身がお諭しをいただく形になったのです。

私たちは教えを聞いているからこそ「これでいいのだ」と心を治めることができます。くもよみのみこと様のお働きに照らせば、雨が降り、大地にしみ込

み、植物が吸い上げ、やがて蒸発して雲になり、また降る。この果てしない循環は、人間の力ではなく親神様のご守護であり、教祖はその理を教えてくださいました。それを理解し、心を治めて暮らせば、神様は最も良いようにご守護くださる。これこそ十全の守護の働きであろうと思ふのです。

そう思った時、先ほどの五代のご婦人は「つなぎのご守護」を頂いているのだと感ずるようになりました。三度倒れた時も必ずそばに誰かがおり、必要な時には家族がいる。外出先でも人のいる場所で倒れる。この方には人とのつながりがしっかりと与えられている。信仰する中で神様から徳をいただき、いざという時に神様が守ってください。これが教えに示される徳の姿であり、そのことを秋季大祭で改めてかみしめました。

そして、まだ「不幸せ」だと感じている人に対し、「いや、そうではない。この生活の中にありがたい姿、幸せな姿がすでにあるのですよ」と伝えていく

こと。これが私たちようばくの役割であります。秋季大祭を迎え、神様の思召される陽気ぐらし世界実現に向かって手足となつて働くのは私たちであると、あらためて胸に刻ませていただきました。

教祖百四十年祭を三ヶ月後に控える今、私自身の体験から思うことをお話しします。今年五月、教会で木の伐採をしていた際、跳ね返った枝が左足に落ちて骨折しました。全治三ヶ月で生活には支障がありませんでしたが、左足であったことに深い意味を感じました。おさしづには「左善右悪の理」が示され、左の身上は将来に向けてのお知らせ、右は自らの過ちを諭される知らせであるとお教えられています。この骨折は、三年千日の年祭活動において、私自身の心がどこか足りていないという神様のお知らせであると受け止めました。

真柱様は、「三年千日は動くことが大切」「皆が一手一つとなつて歩んでこそ教祖に安心いただける」と繰り返し仰せられ

ています。会長一人ではなく、教会につながる皆が心を揃えること。そのために働きかけ、丹精を続けるのが会長の務めである自覚し、家族とも相談して仕切り直しをすることにしました。まずは九月の布教推進月間に向けて信者さんにもう一つ成人の階段を登ってもらいたい。そこに向かう空気を作っていこうと、にをいがけへ新たに足を運び、路傍講演を行い始めました。

そして迎えた八月の月次祭。翌月の布教月間を皆で頑張ろうと呼びかけたところ、九日間の布教日に毎日誰かが必ず参加し、中には初めての人も加わり、互いに声を掛け合ってその輪が広がっていったのでした。私は「神は心に乗りて働く」とはこれだと感じ、今までの私はどこか心がふわふわしていたと気づかされ、真剣に願い、真剣に声をかければ思いは必ず伝わることを教えていただきました。

教祖百四十年祭まで残り三ヶ月。今からでも成人の姿は必ず見せていただけると信じています。最後の仕上げの三ヶ月を、

それぞれが決心して勇んで通らせていただきたいと思います。これで終わらせていただきます。ありがとうございます。

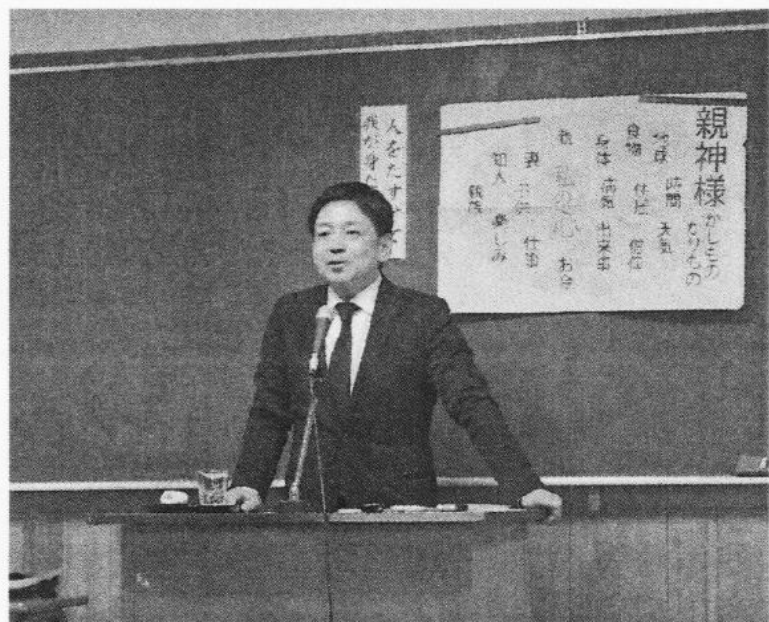
教祖百四十年祭の詳細は以下のURLまたはQRコードからアクセスしてご確認ください。

<https://www.tenrikyo.org/oyasama140nensai/>



宇仁大教会一斉団参

今年はより一層の心の成人とおたすけの実をお見せ頂くべく「二度でも多く、一人でも多くおぢばへ」を毎月団参を実施させていただいておりますが、その集大成とも言うべき一斉団参を十一月九日に実施させていただきました。約百二十名が参拝し、内四名が別席（内初席一名）を運んだ。



午後からは郡山大教会部属周海分教会長の福江弘一先生による「おかえり講話」を開催。教祖百四十年祭に向けて一手一つ

に勇んで歩み切らせて頂くことをお誓いさせていただきました。来月は最後の毎月団参を二十一日に実施いたします。年末お忙しい中かと思いますがよろしくお願いいたします。

〇十二月の毎月団参のご案内

〈日時〉

十二月二十一日（日）

十一時半 東礼拝場集合

〈内容〉

午前 本部お願いづとめ参拝

午後 詰所周辺ひのきしん

十二月開催の毎月団参についてのお問い合わせは十二月担当（片岡保一郎 090-5019-7371）まで
また、詳細は左記のQRコードからご確認ください。



第九十九回

青年会総会

十月二十五日、「第九十九回天理教青年会総会」が本部中庭にて開催され、宇仁分会から九名が参加させて頂きました。

中山大亮青年会長は告辞の中で「青年会活動の根本に立ち返り、布教と求道と伏せ込みを通じて、あらきとうりようの真価を発揮しよう」と呼びかけられました。

式典後、中山会長を芯に東礼拝場にてお願いづとめがあり、宇仁分会も共に勇み心でおつとめをさせて頂きました。



今回は毎年開催される後夜祭がなく、それに変わる何かを分会事で行って下さいとの事でしたので、宇仁分会はその後詰所にて親睦会をさせて頂きました。親睦会には青年会以外の方も合わせて二十名以上の方が参加下さいました。

その中の一人の青年会員さんに十数年ぶりに出会った懐かしい方、Aさんがおられました。Aさんによると、リアカーでゴミ払いをしながら日本一周をされていて、教会にも二、三回お世話になったので、本部にも一度御礼の参拝に行かせて頂こうと未信者の女性の方と参拝にいられたとの事でした。

その日が偶然、青年会総会の日であり、親睦会にお誘いしたところ、快くご参加下さいました。

その偶然は、親神様がお引き寄せ下さったのだと本当にありがたく感じさせて頂きました。

親睦会は今後の宇仁を背負う若者達にとって大事な繋がりと勇みの会になったのではないかと思います。

最後になりましたが、ご参加下された方、またお声がけお心寄せ誠にありがとうございます。



おぢば通信

十月のうごき

◎教人資格講習会修了

豊原 有澤 秀則

◎をびや許し

鍛冶屋 大西 理央
神羽 伴 みさき

◎十月帰参者 二一九名 (詰所調べ)

十二月行事予定表

6日 青年会例会

9日 婦人会例会

15日 布教実動日

21日 大教会毎月団参

22日 少年会例会

24日 大教会月次祭

26日 本部月次祭
午前十時三十分執行

27日 大教会餅つき
午前九時執行

29日 青年会献米団参

婦人会より

◇大教会炊事当番

12月 直 属
1月 神福B
2月 中河合
よろしく
お願いします